

高大連携の試み

——東京藝術大学の管打室内楽・合奏授業への参加——

副校長 鈴木 芳明

音楽科教諭 大平 記子

1. 概説

平成25年度に策定された、「国立大学改革プラン」の中心的課題であった「ミッションの再定義」は、「それぞれの大学の強みや特色を伸ばし、社会的役割を一層果たしていくため（に）、国立大学の機能強化」を図ることが目的であった。そして、その「ミッションの再定義結果」が、文部科学省のホームページ上に公開されているが、東京藝術大学（以下「藝大」）は、「教員養成分野の大学」には分類されず、「特定分野の大学」に分類されている。その理由は、東京藝術大学は音楽学部のみ附属高校を有してはいるものの、教育学部を設置しているわけではなく、教員養成のための大学というよりは、優れた音楽家や芸術家を育てるための大学であるということで、「特定分野の大学」に認定されたのではないかと推測される。

「教員養成分野の大学」で、教育学部を有している大学であれば、その教育研究や指導法を実践する場としての、あるいは教育実習の受け入れ先機関としての存在意義や役割を示すことができるであろうが、教育学部を持たない、本校のような附属高校は、どのような存在意義を示し得るであろうか。全国の音楽高校の拠点校としての牽引的役割や、先進的な音楽教育を実践するモデル校としての存在意義や役割を示すことももちろん考えられるが、今回は、近年話題になっている高大連携（高大接続）の実践例の中でも、特に「早期専門教育」のために創設された本校の実践例を紹介しながら、従来の視点とはまた違った附属のあり方を問題提起していきたいと思う。

(1) 早期教育の必要性から生まれた存在意義

本校は、戦後復興が進み、高度経済成長期を目前にした昭和29年（1954）に、日本で唯一の国立の音楽高校として創設された。

音楽家にとっての早期専門教育の必要性や重要性が強く叫ばれ、関係者の篤い情熱と努力が実り、やっと実現した音楽高校でもあった。そのため、当時の大学の教員は、手弁当で高校生を教えたところから始まったと聞いている。優れた音楽家を育成するために、大学の教員自らが高校生の教育に携わったところに、他の高校ではまったく見ることのできない本校の特筆すべき点があったと言えよう。

つまり本校は、優れた音楽家を育てるためには、質の高い「早期専門教育」が必要であるという、「大学からの必要性」により生まれた高校なのである。前述した、文部科学省が策定した「ミッションの再定義」ではないが、附属学校園の存在意義が改めて検証されるようになった今日において、本校の創立目的は、文部科学省が「教員養成分野の大学」に求めている附属のあり方とはまた違った、附属の根源的な意味合いを示しているとも言えるのである。

そして、高校側から見ても、大学からの予算的な支援はもちろんのこと、専攻実技のレッスンははじめ、オーケストラ、合唱、室内楽、ピアノ初見アンサンブル、ソルフェージュ、聴音、音楽史等の日常的な授業や、入試、実技試験、成績会議といった試験や成績関係、そして高校の教員の代表と学部の各科主任から構成される運営委員会や、人事の選考委員会に至るまで、およそ附属のありとあらゆる領域において、大学の教職員から日常的で組織的な支援を受けているのである。

現在においても、藝大の推薦制度はまったく存在せず、一般の受験生と同じ条件で受験しているにもかかわらず、9割以上が実力で藝大に進んでいるという実績からもわかるように、附属である本校も、当然ながら大学に多くの点でつながりを求め、そして大学を必要としているのである。

今日において、特に進学校であればあるほど、附属であるにもかかわらず、同じ系列の大学へ進学することはなかなか難しいのが現状ではなかろうかと思われるが、本校においては、本校を受験する目的が、そもそも藝大に進学したいからという点において、他の附属高校とは大きく異なる特色を有しているのである。大学が附属を必要として、附属も大学を必要としている、その大学に進学したいから、全国から優秀な受験生が附属に集まってくる。附属とは、本来そうあるべきものではないだろうか。これらのことは、近年、「高大連携」や「高大接続」の必要性が叫ばれ始めているが、附属高校のあり方やあるべき姿、あるいは高校から大学へと続く教育制度を考える上で、大きな示唆を与えるのではないと思われる。

(2) 高大連携（高大接続）の教育実践事例

① カリキュラムと授業内容

音楽高校であっても、一般教科（普通科目）の授業は当然行われている。総合的な学習の時間やホームルーム活動も必修である以上当然実施している。国語、英語、保健体育、情報、家庭の各教科は普通高校とほぼ同じ単位数だが、数学、地歴・公民、理科の単位数が少なく、その代わりに音楽科目が入ってくる。

音楽科目は、音楽理論、音楽史、鑑賞研究、演奏法（演奏研究）といった理論系（楽理系）科目と、ソルフェージュ、合唱、室内楽、ピアノ初見アンサンブル、オーケストラ、専攻実技、副科実技（副科ピアノ、副科声楽、副科打楽器）といった実技系科目とに分かれ、それらの音楽科目のほとんどにおいて、大学との連携が意識された教育が、日常的に、そして組織的に行われている。

高校の専任教諭は、一般教科が4人、音楽科が5人（再任用教諭を含む）、養護教諭が1人と少なく、しかも、一般教科は、それぞれの教科の三学年分すべての科目を担当しなければならない。授業はもちろんのこと、入試、実力試験、定期試験等のすべてのことを、ほぼ一人でやらなければならない。しかし、一般教科が、大学と連携して教育するということは、今のところあまりなされてはいない。

音楽科の5人は、ピアノ・弦楽器・管楽器・作曲（音楽理論・演奏研究・ソルフェージュ）の専門家で、高校の教育を担当することはもちろんのこと、大学（音楽学部）のそれぞれの部会との教育内容の打合せや諸連絡、共同研究の打合せ、非常勤講師との連絡等において重要な役割を果たしている。

その専任教諭以外に、大学との兼任教諭が38名、非常勤講師が51名、管理職を含めた計101名の教員が、一学年1クラス、40人定員の三学年で合計120名の生徒の指導をする体制になっている。

専攻実技のレッスンは、基本的には大学の教員が放課後に行い、大学の教員が持てない場合は、非常勤講師が担当する。コンクールや演奏会に出場する場合も、まず実技教員の許可が必要で、その後に学校へ届けを提出することになっている。日常的な練習や勉強の仕方、心構え、進学・進路指導から留学の相談に至るまで、門下生として、音楽や人生に関するあらゆることをそこで学んでいく。

オーケストラや合唱、室内楽、ピアノ初見アンサンブル、ソルフェージュ、副科実技等の授業も、高校の教員と大学の教員が連携して話し合い、高大の7年間で意識しながら計画的に行われている。また、それらの実技科目を担当する指導者についても、大学の関係部会との協議の上で選ばれ、そして教育内容が決まっていく。定期演奏会の曲を決めて指揮者を選ぶ場合も、大学の指揮科に助言と指導を仰いでいる。6年前から始まった北区との地域連携の一環でもある、北区主催の音楽会で演奏する場合も、校内のアカサスコンサートから室内楽の代表が選出されているのだが、その指揮者の選出やコンサートへの出場の許可も、すべて関係部会や実技教員と相談の上で決められている。

担任は、クラスの生徒の生活全般の指導をし相談を受けているが、生徒全員に対して、専攻実技と副科実技において、それぞれの担当者がついている。しかもその実技担当者は、皆一流の演奏家ばかりである。音楽に関する指導は基本的にはそこで行われているが、実技担当者に言いにくい相談や悩み事などは、養護教諭を始め、高校の教諭ならば教科を越えて、誰もが生徒の相談に乗っている。生徒の約3割が地方出身者で、親元を離れて下宿生活をしているので、時には親代わりとなって親身に相談に応じている。生活を安定させて心が落ち着いていなければ、とても練習どころではないからである。

② 実技試験の採点と評価

学期毎の各学年の専攻実技試験は、それぞれの専攻毎に日にちを決めて、まとめて実施されている。実技試験の評価は、大学と高校の教員が、全員で採点した上で評価が出されている。決して、レッスンを受けている先生一人のみの評価ではないことに注意してほしい。各部会の教員すべてが、高校生全員の演奏を聴いて採点しているのである。言ってみれば、芸術を評価するにあたって、個人の主観による偏りを極力排除して、公平に評価されるように、工夫や配慮がなされているのである。これらのことから言えることは、少なくとも実技に関しては、高校と大学の教員全員が、高校生全員の指導を、責任をもって行なっているということである。大学の教員が、高校生にとって最も重要な教育の根幹部分にここまで携わっている教育制度は、おそらく他に例を見ないだろう。この極めて質の高い教育が、日本の教育界に存在していることをぜひ知っていただきたい。

生徒は実技試験が終わると必ずレッスンの先生の所へ行って、自分の演奏がどうであったか講評を求めている。その姿を廊下等で垣間見ていると、一人の音楽家を育てるために、いかにきめ細やかな指導が、高大連携（高大接続）の名の下に行われているかということを知ることができるのである。

③ 成績会議と運営委員会

実技試験の採点と評価に大学の教員が関わる以上、成績会議も高校の教員だけで行われる一般的な成績会議だけでなく、大学の教員（基本的には各科の主任が参加する）と合同で行われる成績会議とがあり、それらの会議は前・後期共に行われている。音楽の評価が高くて、一般教科

への取り組みが不十分であったり、遅刻や欠席が多かったりと、生活面に問題がある場合は、実技担当者からも指導ができるように、その成績会議の場で情報交換が行われている。

高校のことは、基本的には職員会議で議論し高校内で決められていくが、大きな行事や校則・規則の変更、人事などは、最高の議決機関である運営委員会での承認が必要となる。この運営委員会は、高校の教員の代表と大学音楽学部の各科主任から構成されている。

④ 人事

高校の専任教諭や非常勤講師の人事は、英語科の ALT に至るまで、すべて公募で採用を決めている。その選考委員会は、高校の教員と、大学の関係分野の教員とで構成されている。実技の非常勤講師に関しては、大学学部の各部会に選考を依頼している。高校で公募する場合は、事前に必ず運営委員会で承認を受け、選考結果もその都度承認を受けている。

⑤ 新たな高大連携（高大接続）の模索

最近の経済状況や将来に対する不安からか、全国的に芸術高校や芸術大学への進学率は下降状況にある。また、高校進学時の15、16歳の全国的な人口も急激に減少している。中には定員割れをおこしている芸術系の学校も決して珍しくない。

本校においてもかつてほど楽観できる状況にはないが、それでも定員の約2.5倍の応募がある。しかし、管打楽器や邦楽専攻の応募者数の減少には、強い危機感を募らせており、その打開策として、平成25年度より、フルート以外の管打楽器専攻の生徒に対して、大学生の本管・金管合奏と管打合奏の授業への参加が認められることになった。具体的には、大学の月曜3限の金管合奏の授業に、本校の金管専攻の生徒が参加し、大学の月曜4限の管打合奏の授業に、本校のフルート以外の管楽器専攻の生徒全員が参加することになった。この大学の授業への参加については、高校の室内楽の授業として単位を認定し、出席も取っている。これを実現するために、高校としても従来の時間割を変更して対処した。

全国的に高校では吹奏楽が人気であるにもかかわらず、本校への管打楽器専攻の受験者数が少ない理由は、本校では特に金管専攻の生徒の人数が少いために、室内楽や吹奏楽を経験できないことが大きな要因になっていることを、大学の管打部会より指摘された。さらにはその打開のために、上述した大学の授業に附属の高校生を参加させて、それを目玉として、附属高校の管打楽器専攻の応募者数を増やそうという具体的な提案までいただいた。こうして、高校生の身分でありながら、大学生と一緒に大学の授業が受けられるという画期的なカリキュラムが実現したのである。

高校の問題を、大学の問題としても捉え実践した事例だが、これこそ高大連携（接続）の最も模範的な事例と言えるのではないだろうか。

この管打楽器科における高大連携の授業の実践結果の報告は、後述する「2. 大学授業への参加が実現するまでの経緯」から「4. 参加の意義」の項目において、担当者より詳細な説明がある。

そして、邦楽科からは、演奏会（講演会）等で、附属高校の学校案内を配るなどの宣伝活動を支援していただいた。それらの活動が、邦楽専攻の応募者数の増加へとつながったのである。日頃の地道な普及活動や教育活動の大切さはもちろんだが、やはり大学を挙げて、高大連携や附属のPRに努めることが、結局は大学全体の活性化へとつながるのではないかと思う。

（文責 鈴木）

2. 大学授業への参加が実現するまでの経緯

(1) 本校の管打楽器専攻生の実態とこれまでの問題

本校は1学年約40名の内、開校以来60年間ほぼ変わらず管打楽器専攻生は4名～8名ほどで、その中で金管・打楽器専攻生は0か1、2名にとどまっている。本校に勤務して約10年間、毎年入学試験を経験してきて、実際に金管・打楽器の受験者数は多くない状況が続いている。しかし、全国には吹奏楽部として優秀な中学校が存在し、その中には将来有望な中学生たちがいることも事実である。にもかかわらず、受験者自体が少ないことの原因を考えると、その理由は様々であり、単純に説明はできないと思うが、推察すると以下のようなことが挙げられるのではないだろうか。

- ① 本校の存在自体が全国津々浦々にまで、知られていない。
- ② 全国に吹奏楽の優秀な中学校が存在するが、それはあくまでも部活動であり、中学3年生時点で、自分の将来を方向付ける音楽高校への受験を考える生徒は多くない。
- ③ 全国に吹奏楽の優秀な中学校が存在するということは、東京近郊とは限らず、それは仮に本校に入学した場合、音出しの可能な下宿先の確保などを考えると、進学させることは保護者の立場からしても容易ではない。
- ④ 仮に入学しても、金管楽器専攻生は1名から数名であり、金管アンサンブルなどをたくさん経験することなく高校生活を終えることになる。それは金管楽器奏者として大切な部分を勉強せずに終わるのではないか、という周囲の懸念がある。

以下に、上記それぞれに対する考えをまとめてみたいと思う。

- ① 本校自体が、今後更にそのPRに努めなくてはならないのは言うまでもない。
- ② 私自身の推測としては、実際、これが一番多いのではないかと考えている。本校を受験する多くの中学生は幼い時から保護者共にその存在を認識し、合格に向けて勉強してきている。中学生くらいから金管楽器を始めて、少し上手になったからといって、即、音楽高校受験に結びつく生徒は決して多くないはずである。
- ③ 東京（本校上野周辺）で、音出し可能な部屋を借りることは経済的な面からみて決して容易なことではない。本年度、東京藝術大学の学生寮が新しくオープンしたことを好機とした。
- ④ 実際に、せっかく本校に入学したにもかかわらず、学校としてその能力を存分に伸ばしてあげられなかった原因の一つだと思っている。今回、大学授業への参加が実現したことで、この問題が少しでも解決していくことを願うものである（これについてはこの後、詳述する）。

(2) これまで（大学の授業に参加する以前）の本校室内楽授業の実態

定期演奏会（例年10月末頃）までを前期期間とし、水、木曜日の6、7限にオーケストラの授業が行われている。これは今後もほぼ変わらないことである。定期演奏会後は水曜日が室内楽の授業に入れ替わる。2時間続きの授業であるので、後期だけではあるが1年間として捉えた時に週1時間であるため、単位数は「1」である（よってオーケストラの単位数は「3」となる）。

弦楽器専攻生は人数も多く充実していて、1年生は全員弦楽合奏を、2年生は弦楽四重奏を中心としながら様々な組み合わせで室内楽授業を行っている（3年生は後期オーケストラ、室内楽ともなくなる）。弦楽器の室内楽に関しては今後もこれが継承されていくものと思われる。

一方、管打楽器専攻生は、室内楽を行うには専攻楽器のバランスが悪く、木管楽器の基本とも言える木管五重奏を組むことはほとんど不可能であり、それでも木管楽器はトリオ等を組み、人

数の多いフルートはフルートだけでアンサンブルを組み、時にはピアノ専攻生に手伝ってもらいながら、全員に何かしらの室内楽曲を割り当てていた。

打楽器専攻生に至っては、その中でアンサンブルをすることは不可能であり、苦肉の策として、弦楽器の1年生の合奏に参加し、担当教員にティンパニの入っている小編成の古典合奏曲を選曲してもらいながら、行っていたこともあった。

そして、勤務してきた約10年のなかで、金管楽器専攻生が多く在籍していた数年間を除き、毎年、室内楽の時期になると更に頭を悩ませていた。金管楽器専攻生が多く（多い時に4～6名）在籍していた3年間は、本校生徒だけでたくさんのアンサンブルをすることが可能で、大変恵まれた環境にあったが、彼らが全員卒業した翌年から、トロンボーン専攻生が3年間1名、次はトランペット専攻生が3年間1名となってしまう、現在に至っている。

トロンボーンの生徒が入学してきた時は、後期の室内楽の授業を行うために大学に協力を依頼し、高校の授業時間帯に、大学生（トロンボーン専攻生2名）に本校へ来てもらい、アンサンブルを手伝ってもらった。

そのトロンボーン専攻生が卒業し、次の年にトランペット専攻生が1名入学してきた。1年目は前年度までと同様に大学生にアンサンブルを依頼したが、その年の年度末に大学管打楽器科から「大学1年生の室内楽、吹奏楽の授業に藝高生も参加してはどうか」という、大変ありがたいご提案を頂戴したのである。

(3) 大学の提案を受けて

大学の授業は、月曜日の13:00～14:30の3限が1年生の木管、金管、打楽器それぞれに別れた合奏、14:40～16:10の4限が1年生の管打合奏（吹奏楽）の授業である。この時間帯の授業に藝高生を出席させるために、本校は大幅な時間割変更を含む大胆な措置を行った。

まず、月曜日の午後を全校生徒がフリー（放課）の状態にするために、それまで月曜日に行われていた5限のホームルーム活動と6限の総合的学習の時間を金曜日に移動させた。それに伴い、火曜日の授業を全学年6限までとした（変更前、金曜日は3年生のみが4限で終了し、1、2年生は5限まで授業を行っていた）。そして、フルート以外の管打楽器の生徒は本校の後期に行われる室内楽授業は履修せず、フルート専攻生のみ、フルートアンサンブルを行うこととした。

（＊フルート専攻生だけ参加しない理由：大学のフルート専攻生が多いことによる）

3. 大学授業の概要

大学生と、藝高生の楽器別人数表は以下の通りである。

	平成25年度		平成26年度	
	大学生 (学部1年)	藝高生 (1年～3年)	大学生 (学部1年)	藝高生 (1年～3年)
F1	6		7	
Ob	3	1	4	1
Cl	5	5	6	5
Fg	4	1	4	1
Sax	3	0	4	1
Hr	4	0	2	0
Tp	4	1	3	1
Tb	3	0	3	0
Euph	2	0	1	0
Tub	1	0	1	0
打楽器	3	0	3	0

(1) 木管合奏

① 担当教員：平成25、26年度共に、須川展也先生

② 授業内容

平成25年度

前期 C. Debussy : Petite Suite

後期 A. Dvořák arr. Ryo Kawasaki : Slavonic Dance

平成26年度

前期 Merry Poppins ~ Saxo Magic

後期 M. Ravel : Le tombeau de Couperin

P. Macartny (Arr. Akira Miyagawa, Rika Ishige) : My Love

(2) 金管合奏

① 担当教員：平成25、26年度共に、日高剛先生

② 授業内容

平成25年度

前期 Susato Suite arr. John Iveson (Six Dances from “The Danserye”)

後期 Alfred Reed : Othello

(A Symphonic Portrait in Five Scenes for Brass Ensemble after Shakespeare)

J. S. Bach arr. Eric Creech : Toccata and Fuga in D minor (BWV565)

平成26年度

前期 P. Dukas : Fanfare pour precede “La Peri”

後期 E. Bozza : Prelude et Chaconne

(3) 打楽器合奏

平成26年度より、本校生徒参加

① 担当教員：藤本隆文先生

② 授業内容

前期 大学生3名がマリリンバアンサンブルをし、本校生徒は見学。

後期 R. Pawassar : Sculpture in Wood

(4) 管打合奏（吹奏楽）

平成25年度

① 担当教員：柄本浩規先生

② 授業内容

前期 Gustav Holst : First Suite in E♭ for Military Band

J. A. Caudill : Folklore for Band

W. Francis McBeth : Masque

後期 J. V. der. Roost : Canterbury Chorale

Nigel Hess : East Coast Pictures

R. Rudin : Lieder ohne Worte

平成26年度

① 担当教員：大橋晃一先生

② 授業内容

前期 J. S. Bach (arr. Koichi Ohashi) : Air on G String

後期 D. Milheau : Suite Francaise for Band

A. Gorb : Awayday

A. Reed : Armenian Dance (Part I)

上記の曲は、前期、後期、それぞれで発表会の場を設けて、大学6ホールで、木管室内楽、金管室内楽、打楽器室内楽、管打合奏4つの団体で合同の演奏会を行っている。また、この発表会に関しては、来年度前期の発表会を本校の学校説明会に合わせて、奏楽堂で行ってはどうだろうか、という提案もいただいている。今後益々この授業が附属と共に発展していくことを願っている。

4. 参加の意義

ここに、本校生徒と大学生へのアンケート結果を報告する。

(1) 本校生徒へのアンケート

〈木管室内楽、金管室内楽、または打楽器アンサンブルの授業を受けて〉

① 良かったと思うところはどんなところですか。

○今までやったことのない曲をたくさん学べて、普段やらないポピュラーなものまで演奏できたこと。

○藝高に同じ専攻の友達がいないので、藝大生に混ざって一緒に室内楽をするのが刺激になった。

- 吹奏楽をあまりやったことがなかったので、一つのパートを複数で合わせることを特に学んだ。
- アンサンブルを楽しむことができた。
- 大人数でアンサンブルをする機会ができて良かった。初見で吹く事が多かったので勉強になった。
- 隣りの人の音や他のパートの音を聴き合ってアンサンブルをする訓練になった。
- 同じ楽器や金管という輪の中で演奏を共にしたり、情報を共有したり、とても充実している。
- 普段高校ではアンサンブルが出来ないので、他の人の音を聴きながら演奏することが勉強になった。

② 難しかったところはどんなところですか。

- 音程を合わせることや、イングリッシュホルンを持ち替えて吹くことに慣れていないので大変だった。
- クラリネット10人くらいに対して、オーボエ5人で音を小さくしないといけない部分が多くて大変だった。
- 良かったと思うことと同時に、数人で吹くと音程が合わなかったことが多かったので、ピッチに特に注意を払った。
- 先輩と縦が上手に合わなかったのが難しかった。
- オーケストラの曲（編曲）を演奏するときに、弦楽器のように吹くのが難しかった。
- ハーモニーや音程を合わせるのが難しかった。
- みんなの演奏、アンサンブルのバランスなどについていくのが難しかった。
- みんなの音を聴きながらリズムや音を合わせることが難しい。

〈管打合奏の授業を受けて〉

① 良かったと思うところはどんなところですか

- 中学の時にやった曲をまたやったりして、その時と全然違ったサウンドでもう一度やることができてよかった。
- 藝高ではオーケストラしかやらないので、ソロばかりになってしまうけど、吹奏楽では同じパートの人がいるので合わせる練習になった。
- 金管も加わってボリュームのある音の厚みで合奏できて楽しい。
- 大学の先輩と管打合奏を学べたこと。
- ブラスの有名な曲を演奏できたこと。（複数）
- 週を重ねてどんどんみんな曲を磨いていくのがとてもよかった。先輩から色々なアドヴァイスをもらえたこと。
- 普段オケなどであまり使わない楽器を演奏できること。

② 難しかったところはどんなところですか。

- 6ホールで練習していたので、打楽器とタイミングが合わなくて難しかった。
- 指がまわらない時は苦労した。
- 他の楽器と音程を合わせるのが難しかった。
- 木管合奏よりもはるかに人数が多いのでタイミングを合わせるのがより難しかった。
- 指揮者の指示に応えるのが大変だった。
- 打楽器が多い曲が多いので、人数が少ないと大変だった。新しい曲の楽譜を練習の当日に渡されて楽器を決めたことや、楽器を運ぶことが大変だった。

(2) 藝大生へのアンケート

① 良かった点、問題に感じた点など遠慮なく書いてください。

〈フルート専攻〉

- 大学生と一緒に授業ができるという環境は、高校生にとってとても良いことだと思う。自分の向上につながるし、勉強にもなると思う。問題はなかった。
- フルートは参加していないので特に何も思わない。あまり交流がないので。藝高生にとって大学生の中でできるのは良いことだと思うが、フルートは人数が多くて藝高生が入れないのはかわいそう。なるべく一緒にできたらよい。
- 色々な人と合奏するのは楽しいし勉強になった。藝高生は羨ましい。附属高校ならでは。高校生の頃から藝大で合奏ができるなんて本当に羨ましい。
- いつもちゃんと時間前に来てしっかり準備をしてくれてとても有り難い。藝高生と会えて嬉しいです。クラリネットなどは人数が増えて良いと思う。

〈オーボエ専攻〉

- 大学生活では1年生なので一番下の存在だが、高校生が入ると自分たちより学年が下の人がたくさんいるので気がひきしまった。授業があるのかないのかなどの連絡がうまくいってなかった時があった。
- 高校生の時から大学の授業に参加できていいなと思う。
- 人手不足の中、自由な時間を削って参加してくれてありがとうございます。皆さん本当に上手で助けてくれた。問題はないと思う。

〈クラリネット専攻〉

- 人手不足なのでできてくれて助かった。(多数)
- フルートの子も3年生だけでも参加したらよいと思った。
- 藝高生との連絡係をつくる。
- 後輩と演奏するのはとても刺激になる。
- ほとんどの楽器は参加しているのにフルートだけいないので違和感があった。
- 年の離れた後輩と交流が生まれるのは良いことだと思った。

〈ファゴット専攻〉

- 新鮮だった。

〈金管楽器専攻〉

- 藝大に入学したいと考えている高校生と一緒に音楽をすることで、よりレベルの高い練習ができたのではないかと感じた。
- 高校生と一緒に授業を受けるのが新しく良いと思った。
- 1年生だけでは人数も足りないし、先輩も忙しいので、藝高生に来てもらって助かった。
- 藝祭も一緒にできたらよかった。
- 自分は高校生のうちから大学生と一緒に演奏することは出来なかったので羨ましい。
- 大学生も高校生も一緒に上達できればいいなと思った。
- 高校生にとっても大学生と一緒に音楽ができることは良い刺激になっているのではないか。

○せっかく同じ場所に通学しているので、このような交流ができる時間があることはいいことだと思う。

〈打楽器専攻〉

○室内楽の授業に関しては人数が1人増えるだけでやるのがかなり広がったので入ってよかったと思う。

○藝高生が羨ましい。

○いつもきちんと時間前に来て、しっかり準備してくれてとても有り難い。

○授業があるのかないのか、などの連絡がうまくいっていない時があった。

以上のアンケート結果から、大学生の感想が大変好意的であったことがわかる。これは、私にとっては少し予想外でもあった。またクラリネットや打楽器など、人数の必要なパートにとっては大学学部1年生だけでは厳しいところが、藝高生が加わることによる現実的なメリットがかなりあったようである。

そして、何より藝高生にとっても、藝高生の管打楽器専攻生だけではとても体験できないアンサンブルを勉強する機会を得て、難しいと感じながらも、大学生から刺激を受けて授業に参加できていることに、大変有意義なものを感じていることがわかる。

藝大に入学してくる管打楽器（主に金管打楽器）の学生の多くが、高校時代、吹奏楽に携わっている。これまでは、藝高に入学するとその機会はほとんど経験することができなかったことが、この授業参加で可能になり、そしてそれは、藝大という高いレベルの学生の集まりの中に入れることであり、大きな得がたい経験を積むことができるのである。

(3) 大学担当教員の感想

① 管打合奏担当：大橋先生（大橋先生ご自身も藝高ご出身である。）

互いに刺激を受けていてよいのではないか。プレーヤーとして、隣りに座ることは大切なことではないか。金管の生徒も、良い音を目指しながら大きな音を出していけるようになるのではないか。また、フルートだけ参加していないが、バランスは悪くなるかもしれないが、（現状でも）ファゴットも吹奏楽としては多いし、学部のフルート自体も既に多いから、あと数名増えてもあまり変わらないのではないか。

② 金管合奏担当：日高先生

良い事だと思う。藝高生の金管が入っても特に問題はなかった。

以上の学生のアンケート、担当教員の感想から、当初私が懸念していた「大学生と藝高生のレベルに差がありすぎて、授業に支障が生じるのではないか」ということはほとんどなかったようである。

5. 今後の課題と展望

具体的な課題としては、大学生のアンケートからも出ていたように、大学と高校の年間授業スケジュールは全て同じではないことによる、授業の有無、または、藝高生が出席できるか否か、などの連絡が不徹底であったことを解決しなくてはならない。大学と高校では、夏休みなどの長期休業期間、またそれぞれの、試験時期、入試時期なども異なるため、高校は通常授業中でも大学は休みであることも多く、またその逆に、本校の様々な行事により、大学では授業が行われているにもかかわらず、出席できないこともある。大学授業の後期は、12月に発表会コンサートを行った後は、授業がない状態である。ただし、授業が行われている時は13:00~16:10という長時間の授業参加であるから、年間を通しては問題のない授業時間数が行われているものと考えることができる。前述のように、それらの連絡体制を整えていきたい。

また、大学生や、大橋先生から、「フルートも一緒に良いのではないか」というご意見があったことは意外であった。これは今後の課題とし、大学のフルートの教員とも相談していきたいと思う。

おそらく、金管打楽器は、それ自体の学習はピアノや弦楽器、あるいは一部木管楽器にくらべると、幼少期から専門的に行う必要はないものであろう。あるいは、現実的に小さな子供には演奏不可能な場合もある。よって、必然的に始めるのが中学校や、あるいは高校などであっても場合によっては才能を開花させ、その道に進むことが可能である。藝高へ入学するには、若干15歳でその決心をしなくてはならず、今後も、たとえ音楽高校に興味があったとしても、実際に受験まで考える中学生が劇的に増加することは難しいのではないかと考えている。しかし、たとえ数年に一度であっても、入学してくるかもしれない優秀な生徒のために、より良い環境を整えておくことは、本校に課せられた義務である。藝高が誕生して60年、金管打楽器の教育に関しては常に問題が論ぜられながらも、解決策が見いだされないまま時が流れていたように思う。しかし、この大学授業への参加は、諸問題全てを解決するわけではないが、より良い教育に向けて事態を大きく前進させ、その一助を担うものだと確信している。

最後に、あらためて、この場をかりて大学管打楽器科の先生方に感謝の意を表したいと思う。

(文責 大平)